

## プレゼンテーションの指導を授業に取り入れる

～「主体的・対話的で深い学び」を実践するために・国語科指導法での取り組み～

北角 尚治（愛知大学 非常勤教員）

**要約：**「主体的・対話的で深い学び」は新学習指導要領のキーワードである。しかし、これをどのように授業の中で実践して行くかが課題である。筆者が高校・大学の両方で授業を持っているメリットを生かし、高校で行ったプレゼンテーションの授業実践を、大学での国語科教育法に授業で取り入れ、大学生にもプレゼンテーションの実践を行わせた。言語活動を生かし、「主体的・対話的で深い学び」につなげる授業の実践報告であり、それを教職課程の授業に結びつけた事例の報告である。

### 1 はじめに

私は現在本学の教職課程で国語科指導法の授業を担当している。同時に私立の高等学校で国語の非常勤講師を務めている。これまで、40年余り愛知県立の高校で教鞭をとってきた。将来の教員を目指す学生たちに、自分自身の経験を生かすだけではなく、現在も行っている高校での授業の成果なども指導法の授業に還元することで、より現場で生きる指導をしたいと考えている。

新しい学習指導要領が小学校では昨年度、中学校では今年度から実施され、高等学校では来年度から学年進行で実施される。私は県立高校に勤めていたときから、新学習指導要領に基づいた指導法の研究などに携わってきた。「主体的・対話的で深い学び」をどのよう

に授業で実践していくのか。言語活動例を生かした、いわゆるアクティブラーニングをどのように授業に取り入れていくのか。また、それをどのように評価していくかなどの実践的研究に関わってきた。しかし、「話すこと・聞くこと」の指導に関しては、さまざまな取り組みはすでにあるものの、なかなか現場では実践に至っていないのが現状である。そこで、私が受け持っている高校生と大学生にプレゼンテーションに取り組む授業を行った。そして、この授業を検証し、その成果や課題を考察し、今学んでいる学生たちの将来の教科指導につなげて行きたいと考えた。

さて、改訂された学習指導要領の柱は「主体的・対話的で深い学び」である。その実践のための方法としてアクティブラーニング（言語活動）がある。さらに、現代社会を生き抜くために情報の活用やICT機器の活用能力の育成も求められている。一方で、コミュニケーション能力の育成は以前から求められているものである。このような学びを統合したものがプレゼンテーションではないかと思う。

発表するために資料を集め（「主体的学び」・情報活用）、グループで話し合ってみよう（「対話的学び」）、そしてテーマを深め（「深い学び」）、ICT機器を使って発表する（過程も含めた全体がアクティブラーニング）。さらに、発表を聞いて質問し、考えを深めていく。これからの学びの中で求められるものが、プレ

ゼンテーションの中には入っている。

基盤教科と言われる国語科でこれを学び、他の教科の学びに生かしていく、すなわち、カリキュラムマネジメントの一つの要素である。

しかし、実際の教育現場の中で有効な指導が行われていないのではないかと思う。特に高等学校ではほとんど見ない。その理由は、次のようなものではないかと考える。

- ① 時間の確保ができない。
- ② 教員自身がプレゼンテーションについて学んでいない（実践したことがない）。

しかし、プレゼンテーション能力の必要性を感じ、この数年間、高校の授業と大学の授業でプレゼンテーションに取り組む授業を実践してきた。

## 2 高等学校での実践

### (1) 研究授業の中でのプレゼンテーション

#### a 原稿棒読みのプレゼンテーション

高校の現場ではプレゼンテーションの授業がほとんどないと前述したが、たまにプレゼンテーションを取り入れた研究授業を見ることがある。そこで行われているプレゼンテーションは、綿密な資料がパワーポイントなどを使ってつくられ、発表用の原稿もきちんと書かれたものであることが多い。すなわち、目を凝らしても見えないような細かなグラフや表を示し、グループのメンバーが順に原稿を棒読みしていく——というものなのである。このプレゼンテーションでは伝わらない、なんとかしなければ……、というのが授業に取

り入れようと考えた一つのきっかけである。

#### b ビフォア・アフターの劇的变化

もう一つ、全く別のプレゼンテーションの授業もきっかけとなっている。

以前勤めていた愛知県立日進西高等学校で、文科省から「高等学校における多様な学習成果の評価手法の調査研究」を平成26・27年度に委託を受け、その指導校長として研究に携わった<sup>(1)</sup>。この研究は、簡単に言えば、アクティブラーニングの実践とそのルーブリックを考えるとというものであったが、その中でプレゼンテーションの授業も行った。私自身がしたものではないが、次のような実践である。生徒のプレゼンテーション能力はある程度あるものとしてグループワークでプレゼンテーションをさせた。ところが、前述のような原稿棒読みのつまらない発表になった。そこで、プレゼンテーションのショーであるTEDを生徒に見せ、自分たちの発表を変えさせたところ、生徒の発表が劇的に変わったというものである。

生徒たちは、よいプレゼンテーションを見たことがないから、うまくできなかつただけなのである。この実践も自分でやってみたいと思っていた。

この二つのきっかけがプレゼンテーションの授業の実践につながった。

#### (2) 原稿を準備しないプレゼンテーション

高校での実践は次のように行った。2020年度のものである。対象としたのは、高校2年生の「現代文」3クラスである。

「現代文」の教科書にイグ・ノーベル賞の紹介の文章が載っていたので<sup>(2)</sup>、その文章を入

り口にして授業を行った。次のような指示を生徒に出した。

次の条件で、プレゼンテーションをしてください

- 1 1人の持ち時間は3分です。
- 2 テーマはイグ・ノーベル賞です。  
これまでに日本人が受賞したイグ・ノーベル賞を紹介してください。  
どのような研究で、どのような点がうけたのか
- 3 発表のための資料（聴衆に見せるもの）は1枚にしてください。  
iPadに作成してください。  
資料を作ることより、しゃべりの内容を充実させてください。
- 4 発表のための原稿は作らずに、自分の言葉で、その場の雰囲気合わせたプレゼンテーションをしてください。
- 5 各グループ内で、同じ年度（内容）が重ならないように調整してください。
- 6 自分の担当が決まったら、各自で調べ、準備をしてください。

中学校及び高校1年のときにプレゼンテーションを経験している生徒が多い。また、全員がiPadを持っており、私の授業の中でもほぼ毎時間使っている。ただし、使いこなしているかといえば、生徒間でかなりの差がある。

発表へのステップは次のとおりである。

- 1時間目 ①教科書の文章を読み、イグ・ノーベル賞について理解する。

②教科書に紹介されている年度以外のイグ・ノーベル賞について調べ、グループの中で情報を共有する——どんなものがあるか、楽しんで調べ合い、雑談でいいので、それぞれの内容について話をする。

③自分が発表（紹介）するものを決める。グループ内で重ならないようにする。

④TEDのプレゼンテーションを見せ、イメージをつかませる。

2時間目 ⑤自分が紹介するものについて調べ、発表の準備をする。

・何を、どの順で、どのように話すかを考える。

・原稿を考えるのではなく、要点をメモする。

・説明資料をスライドで作成する。

スライドには大事なポイントのみ載せ、説明（しゃべり）で補う。

⑥練習をする。

3時間目 ⑦グループごとに発表する。

・グループ内で、iPadのスライドを見せながら発表する。（3分）

・聞いている人は1つ以上の質問を考える。

・質疑応答（5分）。

・相互・自己評価をする。

学校での授業は以上のように3時間しか配当しないが、家庭学習などで各自補うことは構わない。

この授業での目標は「自分で調べたことを生きた言葉で伝えること」である。

後述する生徒の感想にも出てくるが、これまで生徒が経験してきたプレゼンテーションは、原稿を書き、それを読むのが発表であった。今回はそれを禁じたので、生徒もかなり戸惑った様子であった。

しかし、自分が伝えたいことを相手に伝えるには生きた言葉で語らないと伝わらない。そこに今回は狙いを定めた。そのために、資料も最小限（スライド1枚）にすることで、話すことにポイントをしぼらせた。

### (3) 学習指導要領の記述

プレゼンテーションについて、今回の学習指導要領にはどのように書かれているのか。

国語科指導法を履修している学生は、義務教育を目指すものも多く、また、高等学校の学習指導要領は小中学校からつながっているものなので、中学校の学習指導要領や教科書も併せて見ていきたい。

プレゼンテーションという言葉はそのまま学習指導要領には書かれていないが、次のような記述がされている<sup>(3)</sup>。

中学2年：〔思考力、判断力、表現力等〕A  
話すこと・聞くこと (1)

ア 目的や場面に応じて、社会生活の中から話題を決め、異なる立場や考えを想定しながら集めた材料を整理し、伝え合う内容を検討すること。

イ 自分の立場や考えが明確になるよう

に、根拠の適切さや論理の展開などに注意して、話の構成を工夫すること。

ウ 資料や機器を用いるなどして、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫すること。

これらの指導内容を踏まえて、次のように言語活動例が示されている<sup>(4)</sup>。

中学2年：〔思考力、判断力、表現力等〕A  
話すこと・聞くこと (2)

ア 説明や提案など伝えたいことを話したり、それらを聞いて質問や助言などをしたりする活動。

また、学習指導要領の解説には次のように記されている<sup>(5)</sup>。

全学年を通して、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫することを示している。第2学年では、資料や機器を用いるなどして表現を工夫することに重点を置いている。

資料や機器を用いるとは、話の内容に関する本、図表、グラフ、写真などを含む資料、コンピュータのプレゼンテーションソフトなどのICT機器を必要に応じて使うことである。資料や機器を用いるのは、話の要点や根拠を明らかにしたり、説明を補足したり、中心となる事柄を強調したりするなど、聞き手に分かりやすく伝えるためである。目的や状況、相手に応じて、様々な資料や機器を用いながら話すことにより、話し手の考えが正確に伝わり聞き手の理解をより深めることになる。

教科書に具体的な教材が載っているのが2



年生であったので、ここには2年生のものを引用しているが、2年生では資料や機器を用いることにポイントが置かれている。このことは、後述する大学生の実践につながってくる。

ここでは、プレゼンテーションについての説明がされていると言ってもよい。

高等学校学習指導要領では次のようになっている<sup>(6)</sup>。

高等学校：「現代の国語」〔思考力，判断力，表現力等〕A 話すこと・聞くこと(1)

ウ 話し言葉の特徴を踏まえて話したり，場の状況に応じて資料や機器を効果的に用いたりするなど，相手の理解が得られるように表現を工夫すること。

実際の授業は現行の学習指導要領の「現代文」で行ったが、新学習指導要領の必修科目である「現代の国語」から引用した。新学習指導要領に基づいた授業研究であり、必修科目の指導内容が他科目のベースになっているからである。ここには、中学での学習内容を踏まえたうえでの表現がされており、言語活動例も次のように示されている<sup>(7)</sup>。

高等学校：「現代の国語」〔思考力，判断力，表現力等〕A 話すこと・聞くこと(2)

エ 集めた情報を資料にまとめ、聴衆に対して発表する活動。

学習指導要領の解説では内容について次のような説明がある<sup>(8)</sup>。

実社会では多様な聴衆を対象とし、的確に伝えるとともに速やかに用件をやりとりすることが考えられる。その際、相

手の理解が得られない部分を的確に捉え、臨機応変に表現を工夫する必要がある。そのためには、話し言葉の特徴を踏まえて話したり，場の状況に応じて資料や機器を効果的に用いたりすることなどが重要である。

また、言語活動例については次のように書かれている<sup>(9)</sup>。

集めた情報を資料にまとめるとは、伝えたいことを整理し、文章や図表などを用いて資料を作成することである。伝える目的や場、対象に応じて形式や媒体を選択することが必要である。例えば、言葉と図表の割合を考えながら、フリップ、ポスター、スライドなどを作成したり、引用したり加工したりしてまとめることなどが考えられる。

聴衆とは多数の聞き手のことである。相手が聴衆の場合、話し方は非公式な場での気軽な話し方とは異なり、公的な性格を強めた改まった場となるため、話し手との関係や聴衆の興味・関心などを考慮して発表する必要がある。

今回の取り組みでは、こうしたことを目標にして行ったが、公的な場での発表ではないために、改まった場での発表とは行かなかった。敢えて言うならば、そこに向けての第一歩である。

#### (4) 教科書での扱い

上記の学習指導要領を反映して、中学では2年生の教科書にプレゼンテーションの項目が掲載されている。

光村図書の「国語2」では、「印象に残る説

明をしよう プレゼンテーションをする」という教材が載っており、プレゼンテーションの準備から、発表の仕方まで丁寧に説明されている<sup>(10)</sup>。昨年までの教科書では、「魅力的な提案をしよう」というタイトルであった<sup>(11)</sup>。内容的にも、説明で終わるのではなく、プレゼンテーションをすることで自分たちの提案を選んでもらうというところまで、一歩進んだかたちになっている。

光村図書のHPには、教師向けの題材としてこの教材に基づいて、プレゼンテーションを実際に中学生が行っている動画も載っている<sup>(12)</sup>。

さらに、この教材についてのお茶の水女子大学附属中学校教諭の曾我部義則氏の学習展開例が紹介されている。そこでは「今、実社会で活かし働かせる言葉の力の育成が求められている」と冒頭に述べられ、次のようにまとめている<sup>(13)</sup>。

中学校では子どもたちの発達をふまえて、小学校での「①伝えたいことを理解してもらえるように工夫して話すこと（伝えたいこと）」から、「②目的を達成するために工夫して伝えること（伝えたいこと×目的）」へ、さらに「③目的を達成するために相手の求めに対応して伝えること（伝えたいこと×目的×相手）」へと展開していくのがよいと考える。

ここには、プレゼンテーションの進歩の過程が示されている。プレゼンテーションにおいては、目的と目標をはっきりとさせることが大事であり、「何のために伝えるのか」を意識することが大切であるとし、「聞き手のニー

ズを」も求めている。まさに「実社会で活かし働かせる言葉の力」につながるものになっている。

高等学校では教科書の採択が学校ごとなので、共通する教材はないが、新しい必修科目でもある「現代の国語」の中で各社がさまざまなプレゼンテーションを紹介している。

さて、上述したように、教科書にも丁寧にプレゼンテーションについての説明が載っているのであるが、いかんせん堅いのである。当たり前のことだが、「教科書」的な説明である。実践的になってきているとは言え、このままでは聴衆に聞いてもらえるプレゼンテーションとはならない、もっと訴える力を出させたい、それも短時間で効果的にと考え、今回の実践に至ったのである。

#### (5) TED ではどうしているか

スーパープレゼンと言われるTEDではどのような準備がされているのか。

まず、TEDの代表であるクリス・アンダーソンはプレゼンテーションについて次のように述べている<sup>(14)</sup>。

プレゼンテーション・リテラシーは、限られた人たちが持つぜいたく品じゃない。それは、21世紀に欠かせないスキルだ。自分がなにもので、なにが大切かを伝えるための、いちばん効果的なツールだ。それを身につければ、自信は花開き、なにを目指すにしろ人生の成功に役立ってくれるはずだ。

若者の自己肯定感の低さが問題として取り上げられることも少なくないが、プレゼンテーション・スキルを身につけることで、自らに

自信を持つことにもつながるものであると思う。

TED は従来完全な原稿を用意し、それを徹底的に練習することで完璧なプレゼンテーションを提供してきた。しかし、さまざまなプレゼンターが登場する中でルールが見直されてきた。そんな中で、クリス・アンダーソンは次のどちらかだとアドバイスしている<sup>(15)</sup>。

A トークを一字一句完全な原稿に書き起こす(それを読むか、暗記するか、その組み合わせにするか)

B がっちり構成を決めた上で、それぞれのポイントをその瞬間の言葉で話す

原稿なしのプレゼンテーションはその人の技量も必要であり、リスクも大きい。したがって、TEDの登壇者の大半は原稿を用意している。

この基準を授業の中に取り入れるには、時間的な余裕がない。しかし、原稿の棒読みは避けたい。そこで、原稿を用意するパターンの中の、「原稿を箇条書きにして、その瞬間に自分の言葉でそれぞれのポイントを表現する」というアドバイスを参考にすることにした<sup>(16)</sup>。といっても、ほぼプレゼンテーション初心者の生徒たちなので、うまくいくとは思わないが、当初の、「自分の言葉で伝える」と

いう目標を大事にしたかった。

## (6) 発表

1時間の授業の中で、全員が発表し、相互評価、振り返りまでさせたいので、グループごとの発表の形態をとった。

3分で発表→5分で質疑応答→1分で評価の記入。これを繰り返すことで、5人のグループなら、全員の発表ができる。

実際の発表の様子は図1～3のようなものである。

iPadで資料を示しながら発表している。中には直前にグループ内に配信していた生徒もいた。

以下に生徒の振り返りを示すことで、発表の様子を紹介したい。なお、表現の拙いところもあるが、そのまま掲載している。

- ① 台本無しで行うプレゼンテーションは、内容についてまず自分自身が深く理解し、覚え、整理し、それをその場で他人に説明するので、今までの台本ありきのプレゼンより発表するのが楽しかった。また1枚のスライドと自分の言葉だけのシンプルな勝負が語彙力を高めてくれたようにも思えた。発表を聴くときも今までの機械的なものより、楽しくきくことができて良かった。

【図1 グループでの発表①】



【図2 グループでの発表②】



【図3 全体での発表】



- ② 発表するときは、原稿は書かないルールだったので3分何を伝えるべきかを考えて、3分ずっと話し続けていることが難しかった。初めて原稿なしでやったけれど、意外と言葉が出ず、詰まってしまうことがあったので、うまく頭の内で話したいことをまとめられるようにしたい。
- ③ 私がこれまでやってきたプレゼンテーションと違って、写真や図表を主に用いるのではなく、言葉で説明するのは難しいと思いました。台本もなく、ある程度の話の構成は決めていたのですが、周りの反応によって言葉を足してみたりして、良い反応が返ってくると「楽しいな」と感じました。他の人の発表を聴いて「参考にしたい」と思うようなものもあって、良い刺激になりました。
- ④ 言うことを考えながらしゃべることは、自分がそのことがらについて理解をしていないといけなないので、難しかった。人のプレゼンテーションを聞くことで、しゃべり方や進行の仕方を見ることができるので、これはプレゼンでなくても、「相手に伝える」という行動そのものに活かせる気がした。
- ⑤ 上手にその場で話すことができなかったので、話す力をつけなければいけないと思いました。また、友達の発表では、いきなり説明に入るのではなく、聞いている人に問いかけるなどして聞き手を引きこんでいて、私にはそのような発想がなく、いきなり説明に入っていたので、すごいなと思いました。

- ⑥ 今までやってきたプレゼンはスライドと原稿を用意してみんなの前で発表するというものでしたが、今回は原稿を用意しないものだったので、その場で話すことを考えたりと難しい面もありましたが、原稿がないと聞いている人達の表情をしっかりと見れるのでそういう部分はとても新鮮で、楽しかったです。

ここに示したものは一部ではあるが、総じて前向きにとらえており、「楽しかった」「面白かった」「将来役立ちそう」というものが多かった。

各グループでの発表のうち、評価の高かったものは次の時間で全体の前で再度発表をしてもらった。

#### (7) まとめと考察

生徒の言葉を借りて全体をまとめてみたい。

まず、「最初は原稿なしは大変だと思った」ようだ。それは、これまで原稿を用意し、それを読む発表に慣れてきているからであった。そして、しっかりと伝えるためには、「内容をより理解していないといけない」と感じ、「何を伝えたいか」発表の目的を考え、絞り込んでいった。資料も1枚だけなので、何を載せるべきか、悩んだようであった。

そして発表。それぞれに緊張や不安はあったようだが、「発表は楽しかった」と感じた生徒が多かった。それは、「相手の表情が見え」、聴衆の「反応が見えた」からであった。同時に「聞くのも楽しかった」とあるように、発表は聴衆を意識したものになっていた。これまでの原稿を読むスタイルでは、聞き手の



表情を見ることはできず、一方通行の発表であったことがわかる。聴衆の反応によって、臨機応変に発表内容を変えることができた生徒もいた。聞く側としてもこれまで生徒が経験してきたスタイルは面白くなかったようである。

発表を終えた後の感想は、今回の経験は「役立ちそう」と感じており、「相手に伝えるという行動そのものに活かせる」とした生徒もいた。そして、「話す力を鍛えたい」と書いてくれた生徒も多く、これはまさに「学びに向かう力<sup>(17)</sup>」につながるものであると言える。

さらに、「プレゼンをすることで大事なのは聞いている人に考えさせること」と書いた生徒もおり、こちらの期待以上の反応があった。

今回の取り組みの中心である、「原稿を書かない、読まない発表をする」ということと、「資料は1枚にする」ということは、「自分の言葉で伝える」という目標を達成するのに有効に働いたと考える。

今後の課題としては、より多くの聴衆の前での発表ができるようにすることである。

今回の発表は、グループという少人数の前での発表であったので、生徒の精神的な負荷は少なかった。それで、比較的落ち着いて、自信を持って行えていたが、大勢の前ではこのようにはいかないと思う。しかし、そのような場を経験させることも今後は考えていきたい。

文部科学省初等中等教育局視学官の大滝一登氏は次のように述べている<sup>(18)</sup>。

新学習指導要領においては全校種において、資質・能力の明確化が図られ、「何ができるようになるか」がこれまでも増して問われることになる。(中略)「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善は、国語科だけでなく全教科等に求められている。

今回の試みは、このような視点からも一つの成果であったと自負している。

そして、こうした取り組みの成果と課題を教職課程で学ぶ学生たちにどのように伝えていくかということを考えた。

### 3 大学教職課程での実践

#### (1) 「習うより慣れろ」

国語科指導法Ⅱの授業で実践を行った。国語科指導法の授業を履修している学生でも、プレゼンテーションを実際に経験している学生はそれほど多くない。大学生になって、演習等の中で発表はしてきていると思われるが、しっかりとしたプレゼンテーションというかたちではないものが多いようだ。

また、プレゼンテーションについて学んだという経験も少なく、中学のときに授業でやって以来という学生もいた。

こうした現状から「百聞は一見にしかず」、そして「習うより慣れろ」が一番有効であると考えた。すなわち、教育の現場にやがて立つはずの学生に実際の生徒の取り組みを見せ、自分たちも実践するというところを行った。目的を整理すれば次のようになる。

- ① 生徒にプレゼンを指導するために、体験することで指導のポイントを把握する。

② ICT 機器やソフトをとにかく使ってみて、慣れる。

まず、前述の私の授業実践を学生に紹介した。実際の高校生の事前準備や発表の様子も動画で紹介した。そこでの成果であり課題でもある「自分の言葉でどのように伝えるか」ということも強調した。

また、すでに示したが学校教育の現場は、GIGA スクール構想のもと加速度的に ICT 化が進んでいる。ところが、現場では ICT 機器を使いこなせる教員が不足している。目の前の学生たちもレベル差が大きく、PowerPoint をある程度使いこなせる学生もあまりいない状況である。このようなことから、通常の人前で行うプレゼンテーションではなく、動画を作成する形態をとった。

私自身の経験からもやってみて覚えることが大事であり、それは教育の現場でも生きる姿勢であるので、「習うより慣れろ」の実践を行った。

## (2) 「モアイになって語る」

国語科指導法の授業は模擬授業を中心としている。国語科指導法Ⅱで扱う中学2年の教材に『モアイは語る——地球の未来』（光村図書）がある<sup>(19)</sup>。この教材は、モアイ像の製作過程からイースター島の歴史を振り返り、森林保護の大切さを説いたものである。ちなみに、この教材は新旧両方の教科書に掲載されている。模擬授業で担当となった学生が授業をし、他の学生も生徒役として学んでいる。この教材から次のような課題を課した。

### 「モアイは語る」 ～モアイになって今の世界に訴える

- 『モアイは語る』の本文を踏まえ、さらに教科書には示されなかった見方、自分の意見などを題材として、モアイに語らせてください。
- プレゼンテーションソフト（パワーポイントか GoogleSlide）や動画のアプリなどを使って、モアイが語っている動画を作成してください。
- 3分以内で作ってください。
- オリジナリティー溢れる、ユニークな作品を期待しています。
- 提出期限 5月16日（日）
- Moodle に提出してください

この課題は昨年度のオンデマンドで実施した授業の際にも課題としたものであり、学生たちの反響が大きかったものである。

この課題に取り組ませる目的は、前述したプレゼンテーションを行う目的の他に、次のようなものがある。

- ① 教科書に書かれている内容について、他の視点からの研究を調べる。
- ② 現代社会の課題と関連づけて考える。
- ③ 自らの視点から問題提起をする。

これらは、今回学生が取り組む上での課題でもあるが、実際に中学生に指導をする際にも意識していきたい視点である。これらのことも含めて、まず自分でやってみて、何が指導のポイントかを考えさせることが目的である。

## (3) 作品と評価

課題（作品）は次のように授業で扱った。

Moodle に提出された作品は私の方でダウンロードし、授業で見せられるように用意した。学生たちには、授業の場で各自が自分の作品を発表できるように（見せられるように）、パソコンやタブレット、もしくはスマートフォンに入れ、授業当日に持参するように指示した。20人のクラスなので、5グループに分け、それぞれのグループで発表させ、全体の場に紹介したい作品の一つを選ばせた。グループは、今回に限り作品の傾向が分かるように私の方で指示した。

学生が作成した作品は、こちらの期待を上回るユニークなものはいくつかあった。グループワークでも、できのよい作品に話題は集まり、どのようなソフトを使って、どのようにつくったかなどのやりとりがあった。一方で自分の技術の未熟さを痛感した学生も多かった。相互評価をするに当たって、事前に

ループリックも考えさせた。

全体の間では、それぞれのグループから選ばれた作品の紹介、製作過程や作成に当たって押さえていたいことなどを発表させた。次に学生の振り返りシートを見ながら、授業の成果を確認したい。

まず、全体の概要は次のようであった。

グループでの発表はキャラクターになりきって話していたり、SDGs といった近年注目されている取り組みについて詳しく説明していたり、教育番組の1コーナーのように作っていたり様々だった。また、全体の発表を見てもユーチューバーのようなプレゼンや登場人物を複数登場させた NEWS 形式のものなど、非常に個性的で自分にはなかった発想だった。自らの手書きの絵を使っていたプレゼンもあり、手書きはパワーポイントな

【図4 Aさんの作品①】



【図5 Aさんの作品②】



【図6 Aさんの作品③】



【図7 Bさんの作品①】



【図8 Bさんの作品②】



【図9 Cさんの作品】



どのソフトで作られたものにはない力強さや印象の残りやすさがあるなと感じた。プレゼンにおいては聞き手に飽きさせないことや興味を惹くということを意識することが重要だと思った。

ここに示されているように、様々な工夫があり、個性が表れたものであった。PowerPointを使ったものより、動画作成のアプリを使った手作り感のあるものが評判がよかった。中でも一番評判がよく、私自身も感心したのは、手書きの絵を使い動画にしたものであった。次のコメントにより詳しく紹介されている。

A君の発表は、手描きのイラストやナレーション、アニメーションの使い方など工夫を感じる点が多くあり、単純にすごいなという印象を抱いた。特に動画の雰囲気作りがうまく、少し真面目な雰囲気の際は真っ黒の背景に白の文字だけというシンプルだからこそ注意をひくという動画で、メリハリがしっかりとっていて動画に引き込まれる面白さが見られた。

次のようなコメントもあった。

リズムのあるプレゼンテーションに見入ってしまった。特にB君のプレゼンはスピード感にあふれていて印象的だった。スピードが早いと内容が頭に入ってきたのではないかと考えていた。しかしB君のプレゼンでは、言いたいこと(重要なポイント)がテンポよく繰り返されることで、ずっと頭の中に入ってきた。

テンポよくストーリーが展開され、インパクトある手書きの絵がそれにうまく絡み合っていたという点で、A君のプレゼンもおもしろかった。

作成してみたの各自の反省は次のようなものが多かった。

- ・自分のプレゼンは最初、モアイとして語り掛けるようにやっていたが途中から平坦で原稿を読むような感じになってしまったので反省したい。聞き手を飽きさせないような工夫を取り入れることはプレゼンで重要だと感じた。
- ・反省点としては、ただ台本を読んでいるだけのようにってしまった事で、内容的に警告のような感じだったので、その感じを出せたらよかったと思いました。
- ・スライドショーを作る上で一番手を焼いたのは、「話す」ことだった。話したいこと(伝えたいこと)が頭の中にはあっても、それをスライドの中でつながりをもってしゃべるのは思っていた以上に困難だった。
- ・アニメーションの工夫としてもっと引き込まれるような口調で発表出来たら良かったと思った。原稿を読んでいるような話し方ではなく、見ている人に話しかけるような口調であったり、今回ならばモアイになりきって話したりしたほうがもっと良くなったと思った。

よい評価をしたものもあった。

モアイの立場になって話すことができ



たところがよかったと思う。聞き手が聞きやすい声を意識して話したり、「読んでくれたかい？」や「思っているんだ」など、聞き手を意識した話し方の工夫をしたりすることができたところもよかったと思う。また、分かりやすいスライドにすることもできたと思う。たくさん文字を入れてしまうと読みにくいと思ったので、モアイが語っていることで大事な部分をスライドに入れたので、見やすくすることができたと思う。

やはり、どうやって話すかということが課題だったようである。これは、こちらが狙っていたところと重なる。さらに、次のようなコメントもあり、教職、教科指導という観点からも有意義な課題であったと思う。

授業もプレゼンの一環として捉えることができるのではないか。聞く側に発表者はどうすれば理解してくれるのか、工夫を凝らすことにおいても共通する部分があると思う。単に知識を提供するのではなく、プレゼント同様に授業も編集の技術が必要なのではないか。授業1コマの演出によって生徒も興味を示して取り組んでくれることが起こると思う。

自ら体験することで、このように視野が広がったこともよい成果であった。

#### 4 考察とまとめ

教職課程・教科指導法の授業では、学生たちに実践力を付けることが求められている。また、学習指導要領の改訂により小中高の授業現場では、ますます生徒に実践的力、社会

で役立つ力の育成が求められている。そのキーワードが「主体的・対話的で深い学び」であり、言語活動（アクティブラーニング）である。

ところが、学生たちはこれまでの教育の中でそうした授業をほとんど受けていない。現場でも、まだまだしっかりとした実践がされていない。研究途上であるといつてよい。しかし、大学で教職を学び、数年後に現場に行く学生たちには十分とは言えないまでも、その一端を学ばせたい。そのために何ができるか、ということからこのような実践に今回取り組んだ。

体験することでの成果は十分にあったと考える。しかし、大事なのはこれからである。カリキュラムマネジメント的な視点から言えば、この成果をどうやって他の場面で生かすかということである。

数年前からこの指導を受けている高校生は、プレゼンテーションの課題がある大学入試で力を発揮して国公立大学に合格した。また、他の授業の場面でも、こちらの指示がなくても成果を生かした発表に役立てている。大学生たちのこれからの期待したい。

今後もこのような学校現場の実践と密接につながった指導を行い、研究を深めていきたいと考えている。

#### 【注】

- (1) 愛知県総合教育センター HP・「高等学校における多様な学習成果の評価手法の調査研究」・愛知県立日進西高等学校における取組（国語）(<https://apec.aichi-c.ed.jp/kenkyu/katei/gaku-hyouka/2018/hyoukashuhou/>)

- hyoukashuhou.html) に報告書が掲載されている。プレゼンテーションの授業についても報告がある。
- (2) 第一学習社『高等学校改訂版 現代文B』(令和2年発行) 実用の文章3 竹内薫「ノーベル賞 VS. イグ・ノーベル賞」
  - (3) 「中学校学習指導要領」平成29年3月 文部科学省
  - (4) 同上
  - (5) 「中学校学習指導要領解説 国語編」p.89
  - (6) 「高等学校学習指導要領」平成30年3月 文部科学省
  - (7) 同上
  - (8) 「高等学校学習指導要領解説 国語編」p.86
  - (9) 同上 p.92
  - (10) 光村図書出版「国語2」令和3年度版
  - (11) 光村図書出版「国語2」平成29年版
  - (12) 光村図書出版HP 教科別資料2年「魅力的な提案をしよう 資料を示してプレゼンテーションをする」([https://www.mitsumura-tosho.co.jp/kyokasho/c\\_kokugo/material/2nen.html](https://www.mitsumura-tosho.co.jp/kyokasho/c_kokugo/material/2nen.html))
  - (13) 同上 国語教育相談室 NO.60『メディアの読み解きと表現』「単元の趣旨 実社会で生きる言葉の力を」
  - (14) 『TED TALKS スーパープレゼンを学ぶ TED 公式ガイド』クリス・アンダーソン著 関美和訳 日経BP社 2016年7月 p.24
  - (15) 同上 p.186
  - (16) 同上 p.189
  - (17) 新しい学習指導要領の三本の柱の一つ。
  - (18) 大滝一登編著『高校国語 新学習指導要領をふまえた授業づくり 実践編』明治書院(平成31年3月) p.233
  - (19) 授業では光村図書出版「国語2」平成29年版のテキストを使用